

「見る」ことについて

梶田 正子

しばらく前から興味があつて、一歳児がいる家庭を訪問し、お母さんと子どもの日常生活を見せたいだくことがある。職場が休みの時期にしか行かれないので、年に一、二回のことではあるが、どここの家庭でもそれぞれに生き生きとした関わりが展開されていて、とても楽しい。ふだんの生活なので種々の場面があり、母親と子どものコミュニケーションの中に興味深い要素が色々あるが、子どもの「見る」という行為もそのひとつである。

△Nちゃん（一歳一か月）の例から▽

クレープペンシルを一本持って遊んでいる。傍にお絵かきノートとふたの開いたクレープペンシルのケースがある。

N 立ち上がり、クレープであごの下をいじりながらゆっくりおもちゃ箱の所へ行く。

母 クーピーのケースを閉じる。

N お絵かきノートの所へ戻る。閉じたケースを見て、持っていたクーピーを手放し、ケースを持ち上げようとする。

母 ケースを手にとる。

N 母の動作を見ている。

母 ケースを開いて、Nの前に置く。

N 嬉しそうな表情で、両手でケースを持ち上げ、閉じるようにする。ケースを傾けたので中のクーピーが数本はみ出して、ケースにはさまった状態となる。

母 「ア、アア」

N 手をとめて、クーピーがはみ出した状態のケースを見つめる。

N さらにケースを持ち上げる。クーピーが数本、下にこぼれ落ちる。落ちたクーピーを見る。

N クーピーがはさまったままのケースを無理に閉じようとする。

母 「はさまってるの。こわれちゃう。」ケースに手を添えて下に置かせ、はさまっているクーピーを納めて、Nの前に開いた状態で置く。

N 母のすることを見ている。

N ケースの中のクーピーを取り出そうとするが、うまくつまめない。

N ケースを持ち上げる。中のクーピーが全部こぼれ落ちる。空になったケースを見てから、下に落ちたクーピーを見る。

N 右手に空のケースをブラブラさせながら持ち、左手で落ちたクーピーを二本拾い上げ、ケースとクーピーを交互に見る。

母 「アア」

N クーピーを手放し、ケースを左手に持ちかえ

る。その際に自然にケースが閉じて軽く指がはさまる。

N あわてて指を抜き、ケースを見つめる。

(以下略)

*

たった数分間の様子であるが、自分の行動やその他の結果として変化した状況、またその場で関わる母親の行動を、実によく見ており、自分なりに対応しようとしていることがわかる。

△S君(一歳二か月)の例から▽

S 鉛筆を手を持って、傍にあったアルバムに書くようにする。

母 「そっちは書かなくていいの。こっちに書いて。」と、お絵かきノートを示す。

S ノートに書く。

母 「そう、そう。」

S すぐやめて、アルバムの表紙をしばらく見ながら、発声しながら表紙に書く。

母 「そっちに書きたいの。こっちでしょ、こっち。」お絵かきノートを指さす。

S 「コエ、コエ」と言いながら、母を見上げ鉛筆で絵本をさわる。

母 「でんしゃには書いちゃだめだよ。」絵本やアルバムを、Sから少し遠ざける。

S 母の行動を見ている。

母 「はい、どうぞ。」Sの前に、ひろげたノートを示す。

S ノートに書く。
(途中略)

S 座ぶとんに鉛筆で書くようにする。

母 「そこ、おふとんに書いちゃだめだよ。」と座ぶとんをどける。

母 Sを見ながら「これ、ないないしよう。ない

ない。」「ないない」を繰り返しながら座ぶ
とんを押し入れに片づける。

S 母の行動を見ていて、「ナイナイ」と鉛筆を差
し出す。

母 「これもないしないするの。じゃ、ないないし
て。」押し入れをしめるのを待つ。

S 鉛筆は押し入れに入れない。「ニヤイニヤ
イ」と言いながら、押し入れをしめる。

(途中略)

S 鉛筆を持ち上げて、ひろげてある絵本に書
く。

母 Sの行動を見ながら、「アーアー、みんな
ジージ書いちゃって……まあまあ。」諦めた
ような口調で言う。

S 横にあったアルバムの表紙裏(白い部分)に
も書く。書きながら発声し、母を見上げる。

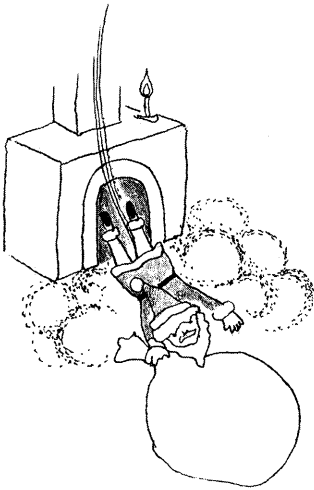
母 Sの手の動きに合わせて、半ば嘆くような口

調で「アーアーアーアー」

S アルバムの写真の上にも書こうとする。

母 あわてて、Sの腕をつかんで制止する。

「あ、こっちは書かないで、だめ、いや。」



- S 腕をおさえられて、不安な表情。
- 母 「これはお写真の上、書きちゃだめだよ。
- S、ね。」と言いながら、Sの腕をはなす。
- 母 Sが鉛筆で書いた写真の上を、手で拭うようにする。
- S 母のすることを、じっと見ている。
- 母 「ないないしようね。もうね。」アルバムを
として、棚にしまう。
- S 母の様子を見る。畳の上に鉛筆で書き始める。
- 母 「ここにしないでよね。」「ジージ、こっち
書いてよ、こっち。」ノートをSの前にひろ
げ、白いページを探す。
- S 母の動作を見ている。
- 母 「ほら、はい、はい。」何も書いていない
ページをSの前にひろげる。
- S 母がひろげたページに書く。
- S 「ドジャー」と絵本の上に鉛筆を移し、母を
見上げる。
- 母 「ウーン、そこに書きちゃって……。」「諦め
的な調子で、Sを見る。
- S 畳の上にも、はみ出して書く。
- 母 「ここはだめでしょう。」「Sの手から鉛筆を
取り上げて、ノートの上に置く。
- S 鉛筆で書いてしまった畳の部分を見る。
- 母 軽く笑いながら、Sが書いた線を拭き取るよ
うに、畳をなでる。
- S 畳を見ている。
- 母 Sが書いた部分を指さしてこすりながら「こ
こ書きちゃだめなんだよ。S、ほら、書き
ちゃだめなの、ジージ、ここは。」
- S チラッと鉛筆を見るのが、母の手の先を黙っ
て見ている。
- (以下略)

*

鉛筆を手にして何にでも書きたい子どもに、書いてよい所、書いてはいけない所の区別が示されていく。Sの母親の話によると、初めの段階では、どこにでもいたずら書きをしまわないうに躰のひとつとして子どもに与えようとした基準だが、言ってもやめないいたずらは禁止するとかえってしようとする傾向があるので、途中から、限度にもよるがやらせておくことにし、そのかわり絶対にいたずらをしてほしくないものは手が届かない所に置くことにしたとのことである。母子の関わりの中で互いに相手の行動を見ることによって、小さな葛藤や相手への期待等を含んだ微妙な調整を体験しながら、価値が導入されて行くプロセスがうかがわれる例である。

〈Mちゃん（一歳三か月）の例から〉

- | | |
|---|--|
| 母 | 棚から裁縫用の巻尺を取り出す。 |
| M | 母を見ている。 |
| 母 | 「目が覚めちゃったの。」と言いながらMの目の前で巻尺を伸ばして見せる。 |
| M | 巻尺を手に取って、いじる。 |
| 母 | Mに見せながら巻尺を伸ばし、縮める。 |
| M | 巻尺を伸ばす。 |
| 母 | 「測ってあげる。」伸ばした巻尺をMから受け取って、Mの背丈を測ろうとする。「さわってちゃ測れないわよ。」 |
| 母 | Mの目の前で巻尺を縮めて行く。 |
| M | 母の動作を見ている。 |
| M | 巻尺を受け取り、巻尺の端を引っ張ったりしていじる。 |
| 母 | Mの様子を見ている。 |
| M | 伸ばした巻尺を母のおでこにあてる。 |
| 母 | 「測ってくれるの。」 |

M 卷尺を母に渡す。

母 「スーって。」と言いなから、Mの目の前で

卷尺を伸ばし、次に縮める。

M 母のすることをじっと見ている。

M 卷尺を受け取って伸ばす。伸ばした卷尺を自

分の首やおでこにあてる。

母 Mが持っている卷尺を、Mの足先から頭の上

まで伸ばして背丈を測ろうとする。「そこを

持っている」と測れないわ。」

母 「巻いて」

M 卷尺をいじっているが、やがて卷尺を置いて

立ち上がる。

母 卷尺を縮める。

(以下略)

*

この例は、母が目的を持って卷尺を使おうとしたが、Mの目が覚めた為に、以前したことのある

卷尺の伸縮の遊びを子どもとしようとして、母が意識的に始めたやりとりである。卷尺を縮めることはまだできない様子であるが、こうした遊びの中で道具の扱いや技術が獲得されていくのであろうことが想像される。

見て感じる、見て気付く、見て思い出す、見て想像する、見て体験して理解する、等々我々の日常生活のあたり前の行動であるが、発達のめざましいこの時期に、信頼に満ちた母子の関わりの中で、子どもが母親を、またその状況を、こんなにも注視しているということは、当然のこととは言え興味深い。一人の子どもの発達という視点からのみならず、最近よく耳にする「家庭における生活文化の伝承の乏しさ(様相の変化)」等の視点からも、私には思うことの多い事実である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)